

三枚のお札

〈改訂初演〉

脚色 金子 泰
作曲 今藤美治郎

秋の山 色とりどりの錦なり 小僧は山へと栗拾い 日暮れまでには戻らぬと
山姥現れ喰われるぞと 和尚に言われていたなれども
気づけばとつぷり暮れにけり

「もし小僧さん 暗くなるまで精が出るのう 今夜はわしが宿貸そうよ」
言う声優しき老婆の姿 いつの間にやら現れたり
こりゃありがたや 小僧はちよこちよこついていき 囲炉裏にあたるそのうちに
こくりこくりと寝始めた

夜の夜中の月あかり 光映して刃を研ぐは 誰そ 正体現す山姥なり
小僧ははつと飛び起きしが

「見たな小僧 逃がさんぞ」

驚き脅える小僧さん 何とかせねばと山姥に

「ばさま わしは厠に行きたくなった 行かせてくれろ」

「ううむ そんなら腰に縄つけて わしがずっと持つていよう 早く行け」

厠の中で小僧はしきりに考えた

「もうすんだか」

「まだだ」

「そうだ もしもの時には頼むがいいと和尚様からいただいた

お札が三枚あったよな

小僧はこつそり腰の縄を厠の柱に結わえ付け お札を一枚貼り付けて

おれの代わりに返事を頼むと拝んでおいて逃げ出した

何も知らない山姥は まだかまだかと問い返す お札は「まだだ」と答えける
こらえきれずに力まかせに縄引けば、結わえた柱が飛んできた

「さては逃げしか」

山姥の形相いとすさまじく 憤怒にみるみる口裂けて

音を蹴立てて小僧を追えば

小僧は次なるお札を投げて「大水 出ろ」

とたんに大きな川流れ 山姥の行く手を阻むと見えしが

ひといきに大水を飲み干したり

これはたいへん 「大火事 出ろ」

最後のお札の火に巻かれしも 飲んだ大水吐き戻し 山姥なおも小僧を追うて
ふもとの寺までやって来た

「おい和尚 小僧を出せ」と凄みしを よう来た上がれと和尚様

「ときにおまえは何でも化けるそうじゃのう 大きなものには化けられるかの」

山姥それと化けたのは 雲つくほどの大入道

「ほう たいしたもんだがのう じゃが 小さいものには化けられまいのう」

「どうだ」と言つて化けたのは 小さな小さな豆のつぶ

和尚様 どれどれ見事と言いながら それをつまんで 焼きたての餅にくるんで
一口に食べにけり
